

圖 版 解 說

一、一五、 ターク・イ・ブスターン大洞彫刻

(青山新論文参照)

六、(1) 千手觀音像 京都妙法院藏

(2) 康圓作千手觀音像 同 (丸尾彰三郎論文参照)

九、十、 傳雪舟筆花鳥圖屏風一雙 東京大橋新太郎氏藏

各隻 竪一六四極 横 端扇五一・五極 中扇六一・五極

(熊谷宣夫論文参照)

七、八、 傳馬遠筆洞山渡水圖 東京田中豐藏氏藏

絹本淡彩 挂幅 竪 七七・九極 横 三三・一極

南宋に於ける繪畫と禪宗との交渉は常に其の時代を同うして、江南に各最盛期を展開せるに止まらない。より深く内的な相關關係をその跡に認めらるる處であらう。素より宋朝文化の多面的な發展として一は宗教に於いて、他は造形美術に於いて爲された完成と云ひ得べく、而も餘りに齊しく美しい開華の相を兩者に於て見るの感を止め得ない。尠くとも各の自然觀或は人生觀に共通な内面的な深さと形式的には端的な克明さを持つ事を認め得やう。かゝる傾向にあつてはアカデミツクな立場にある院畫すらその代表的畫人に依つて此の内的な洗練と直截な表現にその發展の極致と特質を見出してゐる。云ふ迄もなく馬夏の山水、梁楷の道釋と云はるゝもの等この途を示すものに外ならない。又禪林とその周圍にあつてもその實踐的生活に觀照的な所據として頂相を初め繪畫を必需して居る。かゝる交錯にあつて馬遠筆と傳ふる禪僧因縁の圖の存する消息を解するに充分であらう。

此の圖は禪宗五派の一、曹洞の祖師洞山良价の故事を寫すもの、水を涉り影を見て了悟する契機を捉へて、遠山近水の簡單な布景の内に現はす。山は淡色ながら明確な藍隈、土坡を墨隈を以てし、水を白く抜き、纔かに水波の輪廓をゆるく描き、極めて細く柔かな墨線に藍をかけて風に靡く草を描く。およそ岩に於いて太き輪廓を付する外、布景に調子強き描法を見ず、餘白多き一角の景に廣潤な天地を現出し、而もその中の形象は消極的なながら物語るもの決して此の畫にとつて缺くべからざるを感じしめる。禪師の裾を褰げ水を渉る姿はこの中に所謂馬氏一流の概頭描に輪廓付けられて圖の焦點を構成する。疊上げられた衣文の線に依て又衣文に沿ふ處の藍墨の隈に依て水を渉る人の態度を克明に描出してゐる。面貌は細い輪廓線に眼窩、頬下など薄く朱の隈取りをなし、細心な施工の下に其の個性的な相貌を表出し盡すのも宋畫としての例に洩れない。猶ほ睇目に水面を見る如く又見ざる如く、かくて廓然了悟の契機の胚胎を彷彿せしめて、畫の内容的な深さはこの逼迫する刹那の感を豫想する事によつて統制せられてゐる。

馬遠筆と傳ふる此畫が又その傳に相應しく高き評價を持つを故なしとしない。松江の豪家乙部九郎右衛門の集藏たる支那名畫の一としてその藏幅目錄に上の部に列せられたものと云ふ。之と同一對の二幅雲門大師像及び清凉法眼禪師像を天龍寺にも傳來してゐる。圖は兩祖師の禪機を描くもの、その手法全く洞山圖と同様である。何れも圖上に六言四句を題し「坤寧之殿」と讀まるゝ朱文印一顆を捺す。おそらくは五派祖師圖の對幅であつたかとも思はれる。

贊語は各、其の禪師の行狀に言及んでゐる。

(洞山幅) 携藤撥草瞻風、未免登山涉水、不知觸處皆渠、一見低頭自喜

(雲門幅) 南山深藏龍鼻、出草長噴毒氣、擬議揔須喪身、唯有韶陽不畏

(清凉幅) 大地山河自然、畢竟是同是別、若了萬法唯心、休認空花水月

右記の典據に就いては未詳である。洞山圖は元人禪會禪師追贊との説もあるが、その人を明かにしない。贊と印との位置の關係よりして印記を單に玩藏印と見ることなく贊と不可分と考へるを妥當とする。例へば夏珪筆池上圍棋圖及び舟行壁岸圖に伴ふ題詩と印の如き又南宋のものとして軌を一にする。印記「坤寧(寧)之殿」に就いては南宋古蹟攷に「坤寧殿 武林舊事云坤寧樓華二殿皆皇后處居」と在つて南宋皇后關係に出づるを知られる。光寧兩朝の待詔たりし馬遠の作品に多く題語を記した楊妹子即ち寧宗恭聖皇后の妹あることは南宋院畫

錄に就て知らるゝ處である。

之に關してその所錄を拾へば楊妹子楊后之妹、書似寧宗、馬遠畫多其所題、語關情思人或譏之

畫史
會要

六月二十四日赴鑑臺叔招出

馬遠單條四幅俱楊妹子題、

其一(中略)後有楊娃之章

一小方印、寫餘家所藏妹子

題馬遠楊葉竹枝二冊字畫差

大然筆腕瘦嫩略相似(下略)

(美術研究所原板)

原 寸

項鼎銘呼
恒日記

その他に散見し、更に同書馬遠の子麟に關しても

余有女誠一卷、爲馬麟畫、相傳爲寧宗出、實楊妹子書、用御書之印耳(下略)

孫承澤庚
子錦夏記

馬麟雪梅圖小絹畫一幅(中略)上有楊妹子題五言絕句一首、有坤卦印、此乃

楊后印、后即妹子姊也(下略)

吳其貞
書畫記

と見え、楊妹子の書と馬氏一家の畫との關係の密接なるを知られる。而してその書風寧宗御書に似、筆腕瘦嫩と云ひ、必しも此の對幅の贊が適合するとは云ひ得ないが前述池上圍棋圖舟行壁岸圖と伍して南宋宸翰の題記に關して資する事大である。今、この書を遽かに楊妹子と確定し得ないまでも、或は之に女筆

らしき嫩かき筆致の痕を見得ると云へやうか。「坤寧之殿」の印記に就いては前掲吳其貞書畫記の敘述が參考せられ、又同じく馬遠筆と云ふ寒江獨釣圖にも「□□坤寧秘玩」と讀まるゝ一顆を存する。これらの關係からしてこの一對の畫幅の出處が南宋御府にある事を略推定しうる。馬遠畫として寒江獨釣圖或は高士觀月圖に比すれば稍その手法を異にし多く隈を用ひその概頭描のマニールは著しくなつてゐる。其處には主題の人及びその行狀を物語らんとする企圖せられた製作意識と夫に附隨し來る意力的な繪畫効果を以て前二者の何れとも區別せらるべきものがあり、馬遠の父公顯の作とせらるゝ藥山李翺禪會圖の如きに近い味ひをもつ。馬氏一家の説話的な禪宗畫の製作に關しては支那に於ける畫傳は殆んど無關心であり、遺蹟亦我國にのみ見出し得る狀態である。此偏側した結果については遽かに解し難いが、宋元畫の我國に及ぼした影響の一命題たるを失はない。是と同様の立場に在る我國の牧谿畫の尊重と相並んで而もその柔く情緒的と云ひ得べき大德寺藏觀音猿鶴圖の如きに對して之が一種説得の感銘を與へんとする如き鋭い意力的な表示を以て一傳統を形成することは事實として看過し得ない。如拙筆瓢鮎圖の如きその表現は全く之と同範疇に屬するもの、其の我が繪畫史上に出現するの契機を考ふるに當り、その基石は既に置かれしものとの感を深からしめる。唯この畫が寧宗朝、十三世紀初三十年間頃と決定しうるならば、瓢鮎圖等との關係に於てはかゝる作品の日本への移入の時期が問題とせられるが、此の對幅の古き傳來について知る處なきを遺憾とする。この幅が乙部家を出てからは、赤星鐵馬、末松謙澄、下條正雄諸氏を経て現在に到れる事が知られて居る。(熊谷)

註一、眞美大觀十七參照

二、國寶全集十八、國華百廿三參照

三、末松家入札目錄、下條家入札目錄參照

四、國華二百四十七參照

五、國華二百五十五參照

六、國華二十三、眞美大觀十三、後素遺芳參照

七、國華百六十參照

八、眞美大觀一、東洋美術大觀八、國寶全集三十六參照

九、眞美大觀一、東洋美術大觀九、國華百三十七、國寶全集六參照

十、國寶帖五一八、東洋美術大觀三、國寶全集二十六參照